クリピカエースは完璧主義の金型掃除
システムです
全く金型にダメージを与えない！
金型掃除を完璧な形で行う方法を完成させたら無人化にも
成功しました！
ソマックス株式会社
www.somax.co.jp

2006年
7月31日
月曜日
日刊工業新聞

●購読のお申し込みは
フリーダイヤル
（東　京）0120-412346
（大　阪）0120-597117
（名古屋）0120-462346
（福　岡）0120-817120

読書

著者登場

国府（こくぶ）　保周（やすちか）氏

活き活きISO内部監査

工夫を導き出すシステムのけん引役

（日本規格協会刊、03・3583・8002）

成長の大きなチャンス

—ISOコンサルタントとして企業を訪問して感じることは何ですか。

「日本の企業にISOマネジメントシステムが根づいてきた。認証取得した業種も製造業、建設業、サービス業など幅広い。ところが、ISOを道具としてうまく活用できていないところが多い。企業にもよるが、半年に1回程度行う内部監査では、監査する方も受ける方もつらく感じる人が多いようだ」

—内部監査がつらいのはなぜでしょうか。

「記録をまとめることが目的になってしまっているケースが多い。内部監査は日常とは違う視点で見て、本質に迫っていく機会なのに、何となく目につくことを、まとめるだけになっている。するとわざわざ時間をかけてやらなくても、と、面倒なものになってくる」

—うまく内部監査を生かすコツは何ですか。

「内部監査には業務や経営に役立つヒントがたくさんあり、企業を成長させる上で大きなチャンス。いろいろと工夫するきっかけにもなる。工夫をすればするだけ良い方向に行く。どんなことでもそうだが、気持ちのこめ方次第。思いやりを持ってやることだ」

—本書の特徴は。

「ISO関連の書籍はテクニックを紹介した本が多い。本書はテクニックではなく、ISOで企業が元気になれるよう、自分なりに考えてきたことのエッセンスをまとめてみた。内部監査に臨む姿勢や、監査の見どころ、監査の成果を活用する方法などを、できるだけ平易な表現で記した。イラストも入っているので、読みやすいと思う」

—これまでにも何冊か出版していますね。

「シリーズの前作として『活き活きISO9001』と『活き活きISO14001』の2冊を出版した。また、今後は企業の社会的責任（CSR）について国際規格が制定される動きがあったり、品質や安全に企業財務を組み入れた統合マネジメントシステムの重要性が高まっていたりするので、それらについての著書を出版したい」

（三重・藤瀬祥子）

プロフィル　80年（昭55）三重大工卒、同年荏原インフィルコ（現荏原）入社。87年エーペックス・インターナショナル（現ユーエルエーペックス）入社。04年日本ISO評価センター常務。現在はISO関連のフリーコンサルタントとして活動中。三重県出身、50歳。

書窓

敗戦描いた『失敗の本質』で日本の弱点思い知る

環境相

小池（こいけ）　百合子（ゆりこ）氏

戦略的思考の重要さ実感

歴史を客観的に学ぶことには意味がある…と小池さん

テレビ局でキャスターの仕事をしていた20年ほど前、人に勧められて手にした『失敗の本質』（戸部良一ほか著）。日本は太平洋戦争になぜ敗北したのか、何が間違っていたのか。ノモンハン事件やインパールなど主要な作戦の事例について、これらに共通する失敗の要因を冷静かつ客観的に分析している。軍事の専門家だけでなく、外交史や組織論を専門とする学者による共著で、学際的にクロスオーバーである点も興味深い。

そもそも軍隊はすべての組織の代表であり、官僚制組織の究極といえる。一方で有事の究極は戦争。つまり有事における軍隊のあり方を見ていると、そのプラスとマイナスの両面が明確になってくる。

もちろん私にとって太平洋戦争は、歴史でしか知ることができない。だが、現在の日本が抱えている問題と何ら変わらないのではないかと実感する。例えば陸軍と海軍の間で情報共有が図られていなかったことや、「根拠なき楽観主義」のようなものに支配されて戦争に突き進んでいった過程など。これらを見ると、日本は追い詰められると戦略的思考ができなくなる国だとよく分かる。それは今の社会や企業にも共通すると言えるのではないか。日本という国の本質を突いているという意味で怖い本だ。

軍隊は明確な目的を持って進む機能体であるはず。だが、それが内向し、どこからか運命共同体となり、外部との連携を拒むことで失敗に向かっていった様子がよく描かれている。私は常々思うのだが、国家や政府こそ国民を動かし、安心感を持ってもらう機能体であるはず。そのためには互いの組織が運命共同体を超えて機能体となり、連携することによってこそ、大きな力を発揮できるのだと分かる。

「兵力の逐次投入」というくだりも印象的だった。「あれもこれも」は一見すると公平感があるが、イノベーションにはつながらない。選択と集中といった戦略的な思考を日本人は苦手とするのかもしれないが、ここぞという時に資源である財政を集中的に投入してこそ、全体を引き上げる力が出てくる。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と言う。これから生まれてくる人にとり、太平洋戦争は歴史でしかない。だが、歴史を客観的に学ぶことには意味がある。国家であれ企業であれ、人間組織である以上、本書から学ぶことは多い。

—潜在力引き出す源—〈余滴〉

キャスター時代は、さまざまな経済事件を疑似体験できる経済小説を愛読。イノベーションの概念ではP・F・ドラッカーの著書に刺激を受け、いわゆる「日本版401k」について定めた確定拠出年金法推進の原動力となったという。

多忙な公務の中、「読書量は減りがち」だが、議会や官庁の仕事を通じ、さまざまなジャンルに触れている。書物に触発され、日本の潜在的な力を引き出す斬新なアイデアが生まれることが期待される。

（神崎明子）

新刊

（価格は消費税込み）

土木技術者がグローバル社会で活躍するために

『土木技術者がグローバル社会で活躍するために』

三谷浩編著

グローバル化が急速に進む中、土木分野の国際活動はともすれば国内活動に比べて目立たないといわれてきた。本書は海外で成功を収めている数々の事例を紹介し、建設事業のみならず、国際研究・交流など土木関連分野における技術者の国際活動のあり方について、今後進むべき方向を示している。

3章で構成され、第1章は05年9月の土木学会第60回全国大会で行われた著者・三谷土木学会前会長の特別講演の内容を収録。最も紙数を割いた第2章は論文集で、「海外コンサルティングの魅力と悩み」「国内と海外業務のシームレス化」「土木技術者の海外展開とは」「海外建設事業の事例紹介」など、多岐にわた

『「上原正吉」伝　頭から煙が出るほど考え続けろ!」

真鍋繁樹著

社員わずか6人のベンチャーに過ぎなかった大正製薬を、一般用医薬品の国内最大手に育て上げた名物経営者・上原正

そこが知りたい!
プロが教える
うまい売り方
買い買い方

『M&A　そこが知りたい!　プロが教えるうまい売り方買い方』

木俣貴光著

企業の合併・買収（M&A）の話題が連日のように報道されている。最近は中堅・中小企業の間でもM&A志向が強まっているという。だが、いざ「買おう」「売ろう」と思い立っても実行するのは容易ではない。

本書は三菱UFJリサーチ&コンサルティングのシニアコンサルタントを務める著者が、M&Aに関する悩みや疑問に答えた実用書。売り手、買い手のそれぞれの観点から、プロが実際に使うノウハウを紹介している。

一番の課題は、会社の値段をどう算定するかだろう。本書は、創業から間がなく、資産も利益も少ない会社」「資産はあっても、利益が少ない会社」など、タイプ別に具体的な評価方法を示しており、本気でM&Aを考えている経営者の知恵袋になりそうだ。

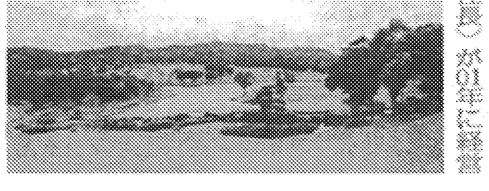
（アーク出版刊☎03・5261・4081　1575円）

花王の日々工夫する仕事術

『花王の「日々工夫」する仕事術』

高井尚之著

「強い」という企業イメージを持つ花王。お[illegible]思いきや、実はそうでもないようだ。



千葉県市原市に
「キングフィールズゴルフクラブ」（0436・36・6111）は
11月の開場で、
したゴルフ場として
れ、東京都心からへ
プターによる送迎が
になった。しかし、
ル崩壊で、接待用に
れてきた同ゴルフ場
巨額の負債を抱え
産。民事再生
法の適用を受
け、晴れて
「鷹子カントリークラブ」（横浜
子区）の系列会社、
クス（市原市、鈴木
社長）が01年に経営